

いしかわ地域づくり円陣2008 全体会
パネルディスカッション

地域の価値を発見、磨く、活かす

発見する力を身につける方法を考える

第1分科会

森山 奈美

株式会社御祓川 代表取締役
石川地域づくり協会コーディネーター

第2分科会

谷内 博史

七尾市街づくりセンター株式会社 事業部長
石川地域づくり協会コーディネーター

第3分科会

近藤 哲史

財団法人石川県産業創出支援機構コーディネーター

第4分科会

辻 貴弘

白山市鶴来まちの駅つるぎ推進協議会 事務局次長

第5分科会

水野 雅男

有限会社水野雅男地域計画事務所
石川地域づくり協会コーディネーター

コーディネーター

赤須 治郎

石川地域づくり協会コーディネーター

【赤須】能美市の副市長から、「地域づくり屋台」という懐かしい言葉が出てきまして、そうか13年前から私はこんなことをやっているのだなと。感慨にふけっている場合ではないのですが。

今日は能美市という里山でこのような会を開くことができました。13年間を振り返ってみますと、都市部か過疎地かという二つぐらいでやってきていたわけですが。今日はその山間部と平野部がちょうど入り混じっている中間地にある山里、里山といったところで開くということは、これからの地域づくりを考える上で非常に示唆に富んでいるかと、今、感慨にふけていたところです。

つまり、中山間地にしても都市部にしても、地域にはそれぞれに意味がある、価値があると思っているわけですが、特にこの里山の地域というのは、都市部の人にとっても意味があり、山間地の人にとっても都市部との交流ということで意味合いがあるのではないかと考えています。それぞれの地域の価値を交換したり交流したりすることを考えるためには、絶好のシチュエーションではなかったかと思い、手を挙げてくださった能美市の方の慧眼に敬意を表したいと思います。

パネルディスカッションでは、前半の部分で分科会の報告をします。その後、今日のテーマが「地域の価値を発見、磨く、活かす」ということですので、パネリストの皆さんがお考えになっている地域の価値とはどういう



コーディネーターの赤須 治郎氏

ものであるのかを具体例を引きながらお話しいただき、その後、会場から少し意見をいただき、セッションをしていきたいと考えています。

それでは、分科会の報告ですが、少し意図がありまして、第1分科会から順ではなく、森山さん(第1分科会)、近藤さん(第3分科会)、水野さん(第5分科会)、辻さん(第4分科会)、谷内さん(第2分科会)の順でお願いしたいと思います。前半の3人の方は、今日はこの会場の中で分科会をやりました。後半の2人の方はフィールドワークをやってここにいられたので、少し違う気がしましたので、その順番でいきたいと思います。

では、森山さんから、分科会の概要を軽く説明してください。そして、できれば分科会の中で森山さんご自身が何を感じ、新しい価値という意味ではどのようなことがあったのか。その辺のことをお話しいただきたいと思っています。

第1分科会 報告

繋がりからのまちづくり

～未来へ繋ぐ市民と行政の協働～

【森山】第1分科会の報告をさせていただきます。私たちのテーブルは「協働」がテーマでした。関戸さんという、名古屋で起業を支援するNPOの代表理事をされていらっしゃる方をゲストにお招きして、協働について考えました。今回は協働について組織と組織の協働ということに限らず、いかに地域の人たちが持っている物や能力、そういったものをつなぎ合わせて地域課題を解決していけるのかということ、事例をお聞きしながら、議論を深めてみたところです。

私たちのグループで見えてきた地域の価値というのは「ソーシャルキャピタル」でした。これは日本語には「社会関係資本」と訳されるそうで、地域課題の解決を地元の人たち、地域の人たちの力でやっていく。まずは「こ

うしたいんだ。ああしたいんだ」という思いがあります。それに対して共感してくれる人が集まってきます。あるいは「こんなことを、私、できるよ」とか「これ、使ってよ」とか、あるいは「こんな情報があるよ」ということが、「こうしたい」ということに対して集ってきます。そして、それによって継続的に地域の課題を解決していけるようなビジネスがそこに生まれてくる。このことを、この繋がりの部分を「ソーシャルキャピタル」というのです。この繋がりが、どうも大事なのだということが分かりました。

そのためには一番最初に誰かが声を発さなければいけないのですが、何か地域の中で解決したい課題、公共的なサービスを提供したいということに対して、企業も「自分はこういうものを持っていますよ」、個人の方も「自分はこんなことができますよ。市民活動としてこういうサービスができますよ」。あるいは行政としては「こんな支援ができますよ」と、それぞれが自分の持っているものを出し合って、差し出していくことが一番の基本です。

それによって構築されることを、先ほどの社会関係資本といいますが、まさにこれが私たちが地域づくりをやっていく上での価値なのではないかと。こういうソーシャルキャピタルをどんどん資本として積み上げていくということが、地域としての価値を高めていくということなのではないか。こういうことが第1分科会では話されました。



第1分科会コーディネーターの森山 奈美氏

実際に後半は、皆さんが持っている地域課題をグループの中で書いて、今日集まった人たちだけでどのくらい解決できそうかというソーシャルキャピタルづくりの第一歩をワークでやってみました。協働の一番きっかけになる繋がりをつくるということを少し擬似的に体験したのです。私自身はこのソーシャルキャピタルというとカタカナで何だか分かりにくいのですが、要は繋がりの強さであったり深さであったり、そういったことが地域にどんどん生まれてくるということが地域づくりの中での価値なのではないかということを感じました。

第3分科会 報告

水と食から地域を見直す

～毎日の生活の中にもこそ、価値あるものが～

【近藤】第3分科会は「水と食」という切り口で、パネルを進めてまいりました。それぞれパネラーの方に、今やっていることを、自己紹介を兼ねてお話ししていただきました。次にパネラーの皆さんが水および食を切り口とした、今、考えていること、やりたいこと等々についてお話ししていただきました。

特に地域の資源とは何かということについて、いろいろお話ししていただきました。住んでいる地域や年代も少し違い、若い木村さんはマニュアル世代だということで、新しく古い物をどういうふうにして新しい形へ作り上げていくかということについて、お話しいただきました。藤木さんは、美川のまちづくりということをしてスタートにして、トミヨを環境問題にも少し進めていって、最終的にはまちづくりが一番大事なのだと。松中さんは大聖寺、加賀の方の人ですから、北前船の持っていた財産というか、保存食等々のことについて、これを掘り起こそうという形で議論を進めてまいりました。

会場の方にバトンタッチしましたところ、吉田さんから水の検定という提案がありまし



第3分科会コーディネーターの近藤 哲史氏

た。日本のおいしい水があります。特に松任、白山市の手取川流水の水はおいしい。これを価値あるものにもっていくためには、やはりきちんとした仕組みが必要なのではないかという提案もありました。それから高塚さんから、米粉を使っていろいろなことをやってみたらバリエーションが増えたというお話もありました。最後には桐野さんの方から、雑煮、祭り寿司という形で、いわゆるハレの食事、ケの食事のところから、何か出てくるのではないかということで、それぞれについて少しお話ししていただきまして、この会を閉じました。

【赤須】ありがとうございます。「水と食」という切り口でしたが、言い換えると水というのは地形であり台地のことです。食というのは、その上に築き上げた人間の文化のことです。私たちの地域づくりは、地域的環境、地形のようなものに根本的には規定されているが、その上に乗っている文化みたいなことも変えていく。それが地域づくりではないかと。環境に影響されながらも、その上にあるものを変えていこうというようなことがあるだろうと。今回はそういうテーマで、「水と食」ということで、郷土の環境と食文化というようなことを話していただいたと思いました。ありがとうございます。

次は水野さん、お願いします。

第5分科会 報告

デザインが持つ“ちから”

～地域資源をデザインするまちづくり～

【水野】「デザインが持つ“ちから”」という第5分科会について簡単にご報告します。最初に金城大学の黒川さんから、デザインの基本的なことをお話しいただきました。デザインにはプロダクトとグラフィックとスペースの三つがある。今回の議論はグラフィック、あるいはスペースのデザインだという、基本的なことを教えていただきました。

その後、彦根からいらっしゃった長崎さんから、ひこにゃんというイメージキャラクターのお話をいただきました。それを期待して参加された方が多く、いろいろ楽しく紹介していただきました。結局、ひこにゃんというイメージキャラクターはグラフィックデザインです。それがうまくいったわけです。築城400年祭にちなんで、ひこにゃんが出てきたわけですが、そのイベント全体で5億円を投入し、直接的な経済効果として174億、波及効果も含めると338億、グッズ売り上げだけで17億という、すごい効果なのです。

それで成功のポイントをいくつか教えていただきました。一つは、やはりひこにゃん自体のデザインがすごく洗練されていた。もう一つは、ネットでどんどん口コミ的に広がっていったと言われました。それから、しっかりとした400年の歴史がある天守閣があって、そこを舞台にして毎回ひこにゃんが出てくる。単にグラフィックデザインの良さだけではなく、背景としてきちっとしたスペースデザインの優れたものがあるとおっしゃいました。確かにそうだと思います。

会場から、金沢で「利家とまつ」があったときにもイメージキャラクターがあったけれど、あまりヒットしなかったという声が出ました(笑)。なぜかよく分からないのですが、一つは猫がブーム、漫画がブームなのではないかというようなコメントがありました。詳



第5分科会コーディネーターの水野 雅男氏

しく掘り下げてディスカッションはできませんでしたが、そういうようなことでした。

長崎さん、あるいは彦根市の方は、ひこにゃんブームで舞い上がっているわけではなくて、きちっとしたスペースデザインとして、キャッスルロードができています。昔は広すぎたと思われたけれども、この前開かれたゆるキャラ祭りでは、2日間で5万人が集まった。その舞台となったのがキャッスルロードです。そのようなきちっと空間がデザインされていて、その中にグラフィックのデザインもうまく収まっているのではないかとおっしゃいました。ペロタクシーとか遊覧船とか商店街の活動など、人がたくさんまちに来ることによって、少しずつまちの人たちも動き出した。「まちが動き出した」と彼はおっしゃっていました。経済効果以外に、そのような良い効果があったということを紹介いただきました。

この分科会では、きちっとデザインするためには、地域の歴史性や地域性、関係性をしっかり見つめることが大事だということを確認しました。

【赤須】「利家とまつ」はどうして駄目だったのでしょうか。観光的にはすごくプラスになったのですが、その後の仕組みがなかったのかもしれない。彦根の場合はスペースデザインがしっかりしていたようなことがあったのかもしれない。

それでは、フィールドから帰ってこられた

辻さん、お願いいたします。

第4分科会 報告

地域資源として「まち」を活かす

～「まちの駅」を活用した地域づくり～

【辻】第4分科会は「まちの駅づくり」で、それを通しての地域づくりということで分科会を行いました。勝山の方からの参加もありました。勝山も「まちの駅」ということで、去年の11月1日から発足しました。鶴来の方は去年11月30日からまちの駅。皆さん、まちの駅はご存じですか。うちのメンバーも「道の駅」と言い間違えるくらいですが、「道の駅」は全国に800所くらいです。「まちの駅」は1200～1400ヶ所です。実は東京のNPO法人が立ち上げた事業で、これで11年目になります。実は今日、富士市で全国大会を行っております。実は私も富士市に行く予定にしていたのが、この「地域づくり円陣」が入りまして、こちらの方に加わりましたが、うちのメンバーは半々に分かれて参加しています。勝山と鶴来の地元の「まちの駅」の事業を通して地域づくりということを行いました。

参加者は、能美市の寺井の牛島の方、あとは、遠く中能登からも来られました。「まちの駅」という事業をなぜ始めたかということ、実は私は今日、これを見せるために着てきたのですが、加賀百万石ウォークを石川県の観光交流局と始めてから6年目になります。実は



第4分科会コーディネーターの辻 貴弘氏

私と県の担当者が、実践しない限り地域はつくれないということで始めたのです。鶴来は金沢からたかが30分のところですが、金沢は黙っていても人が来るのに、鶴来は一生懸命やっても人が来ない。人が来てくれるようなまちづくりをしようということで始めたのが、加賀百万石ウォークです。

それをやってからずっと商店街とかいろいろなところに行き始めたのですが、これでは少し駄目だなと思い始めたのです。それは、お金が落ちない。ただ名所旧跡を案内するだけでは地域に何も残らない。地域貢献するためにNPO法人を立ち上げてやったのですが、商店街の人を振り向かせるためには、ものが売れないと駄目なのです。そこをどうやろうかと悩んでいたときに、実は山代で一昨年、「まちの駅」が立ち上がったという新聞記事が出て、見に行くと、信用組が破産して、ビルが空き店舗になったので、商店街が買い取って始めただけのものでした。これでは駄目だと思いながら、富山、富士市などへ視察に行きました。そして、鶴来のまちの駅ということで立ち上げたのです。

その経緯を分科会で説明しました。11時から鶴来の商店街を1時間歩いて、お昼は地元の物産である舞茸や堅豆腐など、いろいろなものを入れたお弁当を食べました。その後、分科会の座談会の方に入りました。終わってから、また1時間、まちなかを歩いてここに来ました。

その中で皆さんがおっしゃっていたのは、どうやって地域づくりをしようかといっても、結局は後継者がいないといったいつもの話になる。後継者がいないならどうするか。優秀な人材を何とか引っ張りたければ、跡継ぎがないという話になる。儲けない限り、跡継ぎはできない。飯を食べないと帰ってくるはずはない。という話になって、そのためにみんなでスクラムを組んで、「まちの駅」ということで、今45の事業所でやり始めまし

た。お互いの相乗効果で、売り上げが3倍になった店もあります。手作りパン屋さんテレビに出て、売り上げ3倍。今もそれを継続していたり、いろいろな形をやっています。私が始めた白山比咩神社の表参道のおはぎ屋は2年たちましたが、平日には猫しかいなかった場所が、今は平日でも200~300人くらい、休日は1000近い人が来られる場所になりました。

今、鶴来のまち自体は、2週間前に北陸鉄道が廃線の話をして、地域づくりどころか、どんどん過疎化が進むのではないかとというぐらいの形ですが、何とかこの団体を通して鶴来を浮上させようと。私は石川県内で鶴来が一番だと信じて、そのために石川県で一番になろうということでいろいろな事業をやっています。ほかの中能登の方なども、どのようにやっているのかと方法をよく質問されますが、とにかく実践あるのみで、後から振り向いて考えるというような形の地域づくりとして今、鶴来は取り組んでいるという説明をしました。

コーディネーターの谷本さんが、今日は予定があり、全体会には来られなかったのですが、鶴来の今の事業の話をしていたら、「マネージメントとは真似をすることだ」と言われました。ですから、富士市の真似をしました。視察をどんどん受け入れようということで、A1サイズのパンフレットを作ったのです。外部に対しては非常にインパクトがあるようで、実際に富山とか福井から、視察がかなり入ってきています。まずは来てもらう。実際に来てもらえれば何をやっているか分かってもらえる。宣伝が足りないと牛島の女性の方から非常に厳しい指摘もありましたが、こういったことをやりながら、何とか地域をつくってこうというような話を分科会でしました。

【赤須】「真似をすることもマネージメント」と、久々に谷本互ジョークを。いなくても伝

わってしまうということでした。辻さんが今、おっしゃったことは、まちの駅の機能についてですが、人を集めるという集客の意味もあり、さらにそれを経済的なものに価値を交換していく仕組みが、そこにはあるのだということです。この2点を包括しているところが、非常にユニーク、素晴らしい点だと思いました。われわれはとにかく人を集める、集めれば何とかなると思っていますが、集まってきてくれた人たちが持っている価値と、自分たちが持っている価値をどう交換するかということが大事なのです。そのための仕組みをまちの駅の中で作られたというお話であったと思います。

では次に谷内さん、お願いします。

第2分科会 報告

里山からの地域づくり

～体験をとおして見つける地域の魅力～

【谷内】「能美の里山ファン倶楽部」の皆さんと一緒に進めた分科会でした。フィールドワークということで、今日われわれは11時から出発しまして、大体帰ってきたのが3時前ぐらいでした。8日、9日と、近くの公園で「柚子まつり」をやっています、まずその会場を訪れました。この柚子ですが、能美でかつて特産品づくりをしようということの中で、数多く導入されたものが、なかなか特産品としての定着をみないままに、だんだんと生産者が高齢化していった、現在、生産放棄になっている地区もあったり、もしくは外部から農業者が入ってきて、柚子団地を運営していたりということで、今まさに、もう一回再生して柚子の特産品化を頑張っていこうとやっている、その一環のお祭りです。そこに参加してきました。この里山ファン倶楽部でも放棄されてしまった柚子の畑を、つるだらけになっているところを全部取り除いて、柚子のオーナー制みたいなことも始めていきたいといったお話を聞きました。

その後、平成の名水100選に選ばれました遣水、仏大寺という地区から少し奥の方に入ったところにある霊水公園で、ちょうどお宮もありまして、そこで霊水を皆さんと飲んでみました。非常においしいお水です。そこは水だけを見に行ったのではなく、周辺に散策道を能美の里山ファン倶楽部の皆さんが作られて、里山の中をぐるっと回ってまた元に戻ってくるような循環コースに行ってきたわけです。

仏大寺は10軒の集落で、大変高齢化も進んでいます。「ほっこりまつり」というお祭りをやって、大変多くの方がその地域に訪れているという。そんなお話も聞きました。ちょうどこの公民館を使って昼食をとったのですが、霊水のところへ行く道にも、イノシシが掘り返した跡の穴がたくさん空いていました。バスの運転手をされていた能美市役所の方が、「退治したやつを後で食べますから」と言って、お昼にはしし鍋も出てまいりました。地元のお母さんたちが作った押し寿司もおいしかったです。それと、保存食なのでしょうか。今はトンネルができたので、随分行き来が良くなったのですが、行き来が悪かった時代、なかなか生野菜も取れないような冬の時代に、菜っ葉を塩漬けしたものをもう一回塩で戻して、それをダイコンとしょうゆで煮て、昆布だしで食べるという、そういう煮物も出てきました。地元の方が作られたこういうものはやはりおいしいです。お母さんたちの話も聞きながら、お食事を楽しみました。

1日300台近くの手車がやってきて、名水をくんでいくということで、人がやってくるようにはなっているのですが、一方で、例えば夜中でも水をくみに来る人がいたり、最近、ごみを放っていく人が増えてきたとか。いろいろな取り組みをして地域に人が来るのはいいけれども、年取った方が住みたいとおっしゃっても何かあったときには、果たして私たち自身はその方を助けることができるのか。



第2分科会コーディネーターの谷内 博史氏

若い人が住むというなら分かるけれども、年取った人がいいところだから住みたいと言われても、少し躊躇してしまうという、本音の話も聞きました。ただ、地域を開いていく中で、いろいろな方々が住みたいということで、陶芸家の方も移り住んできたりしているという、プラスのところもあると。里山の散策道づくりの活動、イベントから、そのような話を聞きながらのお昼ごはんでした。

最後に炭焼き小屋です。これが里山ファン倶楽部の最初の活動だったようですが、こちらへ行きました。最後に、皆さんが草刈をしたり間伐をしたりしてつけられた道を歩かせていただき、ここのセンターまで戻ってきました。帰ってきて、参加者に感想を聞くと、やはり地域の人々が団結して元気にやっている活動に非常に感動したという声が多かったです。今日は価値という話なので、この後の話に繋がるかもしれませんが、外からやってきた人たちがいると、やはりうれしいのです。いろいろな方に来ていただいた、それでうれしい。うれしいということの中で、少し何か一歩前向きになって、元気になってみようか。元気な活動を起こしてみようかという人たちが増えてきていて、参加者の方からも、「おばあちゃん、おじいちゃんのあの笑顔がすてきだった」という声もありました。里山活動は直接的には、どう里山を再生するかという活動だとは思いますが、そこから派生して、人が元気になるみたいところが非常に印象

に残ったという意見が、後半の意見交換の中で出ていたと思います。

また一方で、3年間活動を続けてきたファン倶楽部の活動は、いろいろな活動をしているのですが、どこに重点を置いてやっていけばいいのかという悩みもお聞きしました。それに対して、ここに力を入れていいのではないかとということもいろいろインプットいただきました。どちらかという価値発見というところまではなかなか至らなかったのですが、里山づくりの中でどのあたりに力を入れてやっていけばいいのか、みんなでいろいろな意見を出し合った分科会でした。

【赤須】ありがとうございます。この「地域づくり円陣」というのは、「円陣」でもあり「エンジン」でもあるわけですが、それぞれ分科会を主催することで、自分の団体が抱えている課題を他の人の知恵も入れながら解決していこうということが狙いです。今、谷内さんに報告していただいた分科会は、里山ファン倶楽部が活動しているフィールドを他の人たちに見てもらい、いろいろ指摘をしてもらったと。さらに自分たちが抱えている問題や課題を披露しながら、解決策があるかどうかを共に考えたという分科会の構成で、短い時間の中でもかなりの成果は上がったということでもよろしいですね、谷内さん。そうでもない？

【谷内】その辺は、これから「能美の里山ファン倶楽部」の皆さんが、どう取り組むかによると思います。

【赤須】そうですね。少し火をつけた。あとは皆さんがその火をどうやってもっと熾こしていくかということにあると思います。

分科会の報告というのは、その分科会に出た人でないと、やはり本当のところというか細かいところまでは、よく分からないだろうと思います。そういったハンディがありなが

らも、コーディネーターの皆さんに、逐一報告をしていただきましてありがとうございます。後日、実施報告書が出ますので、何か確かめたいことがありましたら、そちらでご確認いただければと思います。質問もあるかとは思いますが、次のセッションに進んで、その後フロアから質問を受けたいと思います。

地域の価値を発見するには？

それでは、ずばりパネリストの皆さんに、地域の価値をどうやって発見するか、発見する方法を聞きたいと思います。ただ、その発見する方法を聞かれたら、私などは「それは日々、感覚を鋭くして、あちこち目配りするしかない」というようなことを言うしかないわけです。しかし、それではあまり面白くないので、具体的なものでお話をいただけたらと思います。つまり、発見する方法というハウツーではなくて、こういうものに価値があり、こういうものをうちのところでは伸ばしてきましたよというようにお話をしていたらこうと思います。

森山さんのところは、今、「能登スタイル」という能登の魅力を発信するホームページをやっているらしいです。それはなぜ、そこには「能登スタイル」の考えている価値、コンセプトはどのようなものであるか。その辺のことを少しお話しいただけますか。

【森山】「能登スタイル」というのは能登のライフスタイルのことを縮めて言っているわけです。私自身は今日、七尾から来ました。能登での暮らしぶり、能登での時間の過ごし方、能登で食べているもの、使っているものなどが、実はこれから能登以外で暮らしていっていらっしゃる方々の生活にとっても、価値のあるものになるのではないかという考え方で、能登での暮らしやライフスタイルを新しい切り口で発信している事業です。これは能登半島全国発信プロジェクトの一環でやって

いるのですが、ホームページがあります。そのホームページの中で、能登のさまざまな情報を取材して載せています。

その取材して紹介した情報の中で、実際に売れるものがあつた場合は、これをストアで売っていきこうということで、ネットショップの開設の準備をしています。能登の穴水の高尾商店の味噌、輪島のいしるなどです。私たちにとっては普段のものですが、見せ方を変えたり、コピーをきちんと考えたりして、最後まで食べつくしたり、古いものを大切に使うという考え方が、エコやロハスと言わなくても、普通に息づいている能登の暮らしに少し目を向けていただこうというものです。

私自身は能登スタイルストアの部分の運営をやらせていただいています。その中で、やはり地元でそういった商品を作っていたり、食を生産している方々と会うことになります。そのような方々とお話をしていく中で、また新しい、「あっ、こんなものがあつたんだ」とか、今まで何気なく食べていて自分たちは普通だと思っていたものが、都会の人たちにとっては、非常に珍しいものだったということが何度かありました。

今まで自分の見方というもの、自分たちの今までの経験の中であるのですが、別の見方を持っている人たちと一緒に地域を歩いてみるなど、別の視点を持っている人たちと活動してみると、発見が起こるので、よく地域づくりで「風の人」と言うのは、そういった所以かと思っています。

ですから自分たちが当たり前だと思っていることに、もう一度光を当てるといって、価値を見出すということ、今やっているのかなと思っています。

【赤須】変な言い方をしますが、どこにでもあるような味噌が、能登の味噌ということで、売れるという確信はどこにあるのですか。

【森山】地元の人たちがこんなふうにして使っています、こういうふう料理をして食べていますということをしてできるだけ具体的に取材して、教えてあげるといことを間に挟んでいます。味噌だけ見せてもよく分からないので、使い方やそれをめぐる物語だとかというところが、いろいろな人にとって魅力に感じるだろうという確信の下でやっています。

【赤須】聞きたい部分がたくさんあるのですが、次は近藤さんをお願いできますか。近藤さんは食に関わる商品化に取り組まれているとお聞きしています。地元にある食をどう商品化していくか、どこに価値を見つけて商品化していくかというようなこととお話しいただければと思います。

【近藤】私は松任農業高校（現・石川県立翠星高等学校）で食品制度をずっと担当してまいりました。初任が柳田農業高校で、終わりの柳田農業高校校長で終わりました。教員としては初任校でスタートして、初任校で終わったわけです。松任農業高校には30年ほど奉職していましたが、私は「食品ばか」といっていいくらい、食品のことしかよく分からない人間です。

そういう関係もあり、石川県産業創出支援機構（ISICO）に来てくれないかということで参りました。そこで最初に言われたことは、「近藤さん、あなたはいろいろなものを



全体の様子

作ってきて、いろいろなことをしてきたけど、あなたが作ったら駄目なんだ。企業なりにいろんな人にどういうふうにするかをきちんと指導してくれ」と言われたのです。

初めはそのところが納得いかなかったのですが、だんだんやっていくうちに分かってきたことは、経験的ないろいろなものを作ることはできるけれども、それがどういう形で、どういうふうになっていくという理論的な、あるいは科学的な形できちんと作っていける人は極めて少ないということです。

もう一つ、私がいるところは、県立大学の敷地内にあるインキュベーション施設ですが、そこで皆さまと大学との連携をやっています。大学の方はものづくりができないのです。どういうふうにしていこうかということは皆さんに任せられて、その作ったものを大学が価値のあるものかどうか評価したり、こういうことができるのではないかとということができるのです。その間をつないでいく場合に、ものづくりということがこれから一番大事なことになるのではないかと思います。

先ほど森山さんの話で味噌の話が出てきましたが、能登の味噌は全国的には極めて珍しい味噌です。普通は塩が多くて麹が少ない。これは仙台系の味噌です。塩が少なくて麹が多いのは、京都の西京系の味噌です。信州味噌はその間で、中ぐらいの塩と中ぐらいの麹です。能登の味噌は塩が多くて麹も多い。ほかの味噌から、ぼんと外れているのです。もちろん1年で熟成できるわけではないですから、2年間ねかせます。そして、ずっと味噌を取っていくと、最後にはダイコンが入っていたり柚子が入っていたり、その下に塩があるのです。またそれで次の味噌を仕込んでおく。だから、長年伝わってきた伝統的な微生物がその桶の中にある。形態的にずっと繋がってきた味噌なのです。柚子の丸のままがぼんと味噌漬けになっているのです。それは細かく刻んでご飯に載せて食べてもいいし、イ

ワシ団子の中に少し入れると非常においしくなります。鶏つくねに入れてもおいしいです。だから松任の吉田醸造食品の吉田社長は、「あそこの味噌は塩辛いけれど、ものすごく伸びがいい。やはり能登独特のものだ」と。私はいろいろなところを歩いていくと、そういうことがよく見えてくるようになりました。

能登は山菜王国で、奥能登農林事務所やウドとか、フキとか、ギョウジャニンニクとか、いろいろな山菜を栽培試験しています。それを農家の方へどんどん配布していきます。ところが、どんどんそういったものが育ってきたら、もともと能登には山菜が多いのですが、富山の方からマイクロバスでいろいろな人を乗せてきて、がばがばとウドなりを採っていってしまうのです。湯涌の方でもそういうことがあります。ではどうするか。やはり作ったものは一次加工でも何でもして、それを金沢周辺の企業で商品化して売ってもらえばいいだろうと。物を作るのはそれらが軌道に乗ってから、自分たちで工夫すればいいという。今のところ能登はそういう形で、事例1として教えています。

2番目の事例は加賀の方です。「ごはんばーがー」はご存じですね。あれは最初、話を持ってきたときは「おこめばーがー」だったのです。私は「その名前は駄目。お米は食べられない。ご飯なら食べられる」と言ったのです。すると、「ライスバーガー」という話が出たのですが、これは商標登録されていて駄目なので「ごはんばーがー」という名前にしたら、軟らかくなって食べられるという形で、うまく進んでいきました。バーガーですから中に入れるものを、何か考えなければいけないと。やはりそこは「おくもじだろう」と。だからおくもじを入れる。「丸いも」も入れる。そして、世の中はコシヒカリ一辺倒ですから、私の持論としては、すしに合うお米は何、握り飯に合う米は何、雑炊に合う、チャーハンに合うなど、米の種類によって食べ方もいろ

いろあるだろう、それを考えなければ駄目だと。それで、「ゆめみづほ」をそこに使うようにしたのです。そのほかいろいろ農林の方と掛け合いをして、補助金をいろいろ取るようにして、今のところかなり進んでいます。

もう一つだけ。まちづくりとか何とか言うのですが、やはりアピールする品物がないというところがいっぱいあるわけです。そこで、野々市の例を申します。インキュベーション施設は、野々市が非常に力を入れているのですが、やはり野々市に返さなければいけないと考えていたのです。そこへ、野々市の役場の方から、野々市のブランドになるものが何かないか、中村酒造の工場が清金にあるので、そことタイアップして何かできないかと相談を受けたのです。では野々市ブランド酒を少し考えてみましょうということ。

酒を作るときには酵母が要ります。野々市の町花はツバキです。そこら中にツバキを植えてあるのです。県立大学の矢野先生と久田先生に、ツバキ酵母を分離してもらえないかと。100ほど分離し、次にスクリーニングというのですが、酒に合う酵母をその中から選んでくる。五つほど選びました。ツバキ酵母をまず分離した。それを次にどうするかというと、酒米を野々市の農家に栽培してもらおうと。三納さんがそれを引き受けまして、ちょうど収穫されました。今、中村酒造と県立大で小仕込み試験といって、この米とこの酵母でどういう酒ができるか、どういうものにすればいいかということをやっている最中です。多分、1月か2月に本仕込みに入って、3月の「椿まつり」にはそれが発表できる段階になっているかと思います。

価値というものはどういうふうにとは私の方から言えませんが、今の三つの例から、どこにそういう価値が見い出せるかということをお考えいただきたいと思っています。

【赤須】近藤さんからお話していただいたこ

とで一つ、大事なことに気付きました。それはやはりコーディネーターの役割が大事であるということです。非常に高度な専門知識をお持ちの方が、地域にある資産（財産、資源）を、これとこれというような大きな大局観を持って結び付けていく作業を近藤さんはされているとお聞きしました。そういった存在がぜひ必要であるということです。しかもたったこれだけの出会いで、森山さんと近藤さんが、味噌で結び付いてしまって、これでもう能登の味噌は、すごい価値が付いた、箔が付いたというぐらいのものですね。

【谷内】ぜひそこに、能美の柚子も一緒に入れてください。

【赤須】そうですね。繋いでいく役割をする人の重要さ、大切さというようなことについてお話しただいたと思います。

次に谷内さんをお願いしたいのですが、谷内さんは七尾のTMOにお勤めです。七尾のまちづくりをいろいろな面から見てきたと思われませんが、七尾のまちの中に、あるいは街並みの中に、どういう価値を発見されてきたのか、それをどう伝えてきたのかというようなことをお話しただければと思います。

【谷内】七尾まちづくりセンター（TMO）というものがあります。中心商店街は、昔からの港町の旧地区で、城下町の人が一番たくさん住んでいた地域ですが、そこがやはり商店街も随分と人が来なくなって、どんどんまちもスプロール化というか郊外化していきます。郊外に車で行くような大型店もたくさん出てきて、まちなかはどんどん空き店舗だらけ、シャッター通りになってきた。さらには、子どもたちも減っていくし、住んでいるのは本当に一人暮らしのお年寄りばかりという。実は七尾のまちなかは、七尾市全体を見ても非常に高齢化率が高いところですよ。今日行っ

た仏大寺の地区も高齢化率が高くて、「あと、10軒なんですよ」という話もありますが、実はまちなかも同じくらいひどいです。そういう地区をどうまちおこしをしていこうかということで設立された会社で、今いろいろな取り組みをしています。

とはいえ、その地区は非常に長い歴史の中で、昔からあった地域ですから、祭りとかいろいろいな伝統文化が今でも息づいていて、それこそ「祭りができないようになったら、このまちは終わりだね」と。横でうなずいている森山さんがいますが、七尾にある青柏祭というでっかいやまがありますが、あの「でかやま」が運行できなくなったら、このまちは多分もう死ぬだろうと。けれども、祭りだけは頑張っってやっていこう、祭りがあるから帰ってくるという若い人もいたりして、本当に祭りというのは一つの大きな地域のソーシャルキャピタルになっているのだらうと思います。

6年前にやってきまして、非常に感動したのです。実は、祭りの日に森山さんの家に呼ばれたのです。そうしたら若い人たちが、そのときだけ帰ってきているわけです。「能登の花ヨメ」という映画を観られましたか。あまり加賀の人は見ていないのでしょうか。「能登の花ヨメ」という映画を見ると、僕は涙が出てくるのですが、祭りになると皆、帰ってくるのです。キリコを担ぎにとか、でかやまを引っ張りに。本当にそのとおりで、そのときには皆さんわっって帰ってきて、この町はこんなに人が多かったのかというぐらいに人が多くなるのですが、祭りだけは本当に一つの地域の繋がりを維持してくれている文化的装置なのだらうと思います。それにふれたのです。

そうしたときに、七尾のまちで、若い人たちが帰ってきて、しかも、ある歌があるのです。木遣りという歌があるのですが、その歌をみんなで振りをつけながら歌って、周りの

大人たち、子どもたち、おじいちゃん、おばあちゃんみんなが手をたたきながら、掛け声を掛けながら歌っている姿に、僕は涙が出てきました。そういう民謡をみんなで歌える地域はすごいですね。僕は沖繩くらいしかないのではないかと考えていたのですが、能登にそんな地域があった。これはこの地域で何かできるのではないかというのが、最初のこの七尾との出会いでした。

その価値ですが、やはりそういうものを大事にしているところは、やはり潜在的にいろいろな力を持っていて、歴史が長いからこそそういうものがあるわけで、その歴史をきちっと掘り起こさなければいけないということが、七尾のまちなかで私が最初に感じたことです。ここは歴史的価値を軽んじているということが、最初に感じたことです。

水野さんの分科会ではグラフィックやスペースなどの話がありましたが、やはり建物にスペースの歴史が刻み込まれている。空間の中に建物が残っている、古い建物が残っている、これをきちっと現代でも使っていく、使えるように維持していく。金沢は今、町家を一生懸命頑張っているんですが、七尾も本当に町家が多いところなんです。大聖寺もいっぱいありますね。こういうものをきちっと空間の中に歴史の記憶として残していく、そしてそれを使っていくことが大事なだろうと、まちの記憶をきちっと刻み込んでいる建物をもう一回掘り起こすことが、最初に取り組んだことでした。

具体的にいえば、今一本杉通りという通りが七尾のまちなかにありますが、ここには現在登録文化財に登録されている、いわゆる町家、蔵の建築、それから偽洋風建築とか近代建築、看板建築とかいろいろな建築の種類はあるのですが、そういった少し港町で新しい建築様式をどんどん取り入れながらも、でもやはり構造躯体自体は町家なのです。そういう面白い建物がいっぱいある。これをまちの

人がやっていく中で文化財にしていこうと。ただ文化財登録しただけで終わりではつまらない。何かこれをみんなで歩いて回れるようにガイドツアーをやろうではないかとか。そうになると鶴来にも似てくるのですが。

そういう中で一度イベントができないか。何を飾ろうか。ひな祭りをやっているところがある。でもひな祭りでは二番煎じですね。何かいいことがないかといってやったのが花嫁のれんでした。花嫁のれん自身は多分こちらの地域にもありますよね。別に能登だけのものではない。一本杉だけではないはずなのですが、それをいち早く取り上げたのです。今、通りに何軒もあるお家で飾っていますが、最初は50軒で100枚ぐらいでした。自分の持っている花嫁のれんを自分のお家の中に飾って、それを「どうぞ」とお家をオープンにして見せてあげた。これが最初でした。

人がやって来ると、やはり皆さん元気が出てくるのです。初回は人が来ないと思っていたのに、結構来てしまったのです。来てしまったら、やはり皆さん、「これはちょっと、ちゃんとやった方がいいかな」ということで、それまで看板が曲がっていたのも、きちっと直したりとか、商品にほこりがかぶっていたのもほこりを落とすようになったり。今日、仏大寺のおばあちゃんも元気な顔をしていましたが、やはり人がやってくると、お化粧の一つもするわけです。やはりそういうことだと思うのです。やはり外の人から「いいね、ここ。素晴らしいね」と褒めてもらうと元気をもらえるのです。そういうことが多分、七尾で起こったことだと思います。

現在、花嫁のれん展は期間中(14日間)に8万人の人が来るようなイベントになりました。先日は東京でこの花嫁のれん展を1週間やり、3000人の方が訪れました。この方々はきっと来年、能登に来てくださいます。「能登空港があるのをご存じですか」とアンケートを取ったのです。すると、東京の人は

6割も知りませんでした。「能登ってどこですか。石川県ってどこでしたっけ？」という世界なのです。直接行って、出会ってそこでお話をして、関係ができてということ逆をやったのですが、やはりその価値ですね。自分たちには実は価値があるのだということをお話していただいたのは、実は外の人からでした。私も歴史に興味をもっと持って、歴史を掘り起こそうと言ったのは、私も当初は外の人だったからです。その中から、皆さんで一生懸命勉強しながら磨いていった。今日は磨くという話もこの後出てくるだろうと思うのですが、発見してそれを最初はばか者かと言われながら、声高に、「いや、これは絶対に価値があるって」と言いながら、みんなで磨いていくと、やはり褒めてくれる人が出てくるわけです。褒めてくれる人が出てくると、やはり元気も出てくるし、もっと褒めてもらえるようになる。その善循環ができていく中で、価値はいよいよ高まっていく、定まっていくような気がします。

【赤須】ありがとうございます。地域の中にある古い建物を、文化財として新たに価値を付けたということ。さらにその点在する価値を発信するために、イベントを企画したということ。それが好循環を生み、人が来る。人が来るとまちの人が元気になっていったと。非常にうまく回っていったと思います。うまくいった原因は何かというと、それは多分、私が思うには、やはりきっちり歴史的なものが背景にあるということ。それから祭りが維持できるようにコミュニティの力がしっかりしていて、そういう資産、財産をきれいに守っていたということが根本にはあるのではないかと思います。イベントはとかく一過性というような批判的な見方をされますが、基本がしっかりしていると、イベントはかなり力を発揮できるものではないかと、谷内さんのお話を聞きながら思いました。外の人が価値

を気付かせるということ。先ほど森山さんもそういうことをおっしゃいましたが、どうもその辺がポイントになりそうです。

辻さんは中の人ですが、先ほど随分、お話をいただいたので、今度は具体的な、何か商品の話、このようなものが売れたというような景気のいい話をしていただけませんか。

【辻】私は高校を卒業してから東京に13年いまして、鶴来に平成元年に帰ってきたのです。Uターンなので、外を1回見てから、中に入ってきました。

鶴来というのは実はマルエーの本店も鶴来です。鶴来信用金庫ももちろん鶴来ですし、コメヤ薬局も今、25店舗ほどありますが、鶴来が本店です。高野酢さんは知っていますか。鶴来です。世界一のお酒を出した菊姫も鶴来です。酒造メーカーで県内第2位の萬歳楽も鶴来です。こうやって数えていくと鶴来にはいっぱい、いろいろなものがあるのです。

平成元年に帰ってきたときに、あまりにまちに元気がなかった。僕が帰ってきてから、マルエーの社長や、コメヤの今の社長をしている兄ちゃんに、「何でまちがこんなになったんだろう」と質問しても、商売熱心なのか誰も動いてくれない。実は私は今でも学習塾をしております、それをやる傍ら、昔はこうだったという、歴史を全部掘り起こしてみ、何に価値があるのだろうということをやりました。それが今のきっかけになりました。そういうことで、まちのいいものをもう一回見直そうということから始めて、今、ここに来ているのです。

共通一次世代をご存じですか。実は彼とは高校の同級生なのですが、私たちの一つ下から実は共通一次が始まったのです。今、鶴来は青年団もまだあります。毎年「ほうらい祭り」をしていますので。全国では崩壊した青年団がいまだにありますが、今、鶴来商工会という商工会のメンバーでいうと、私らの下

はもう全然駄目なのです。よく先輩が後輩を見て、「おまえら駄目だ」という駄目ではなくて、本当に駄目なのです。鶴来では1990年に現代アートをテーマにヤン・フォート氏を呼んで、まちなかに現代美術をやりました。今の八尾とか全国でやっている、あれのはしりを5回もやったのです。まちづくりをやったにもかかわらず、今、それが続かない。実は僕らが商工会青年部を卒業した次から、もうやらなくなったのです。人のために汗がかけない。自分のことで精いっぱい。彼らの言い訳も、今、この景気の中でかわいそうですが、人のために何とかするという意識が非常にない。今年2100年祭という白山比咩神社の式年大祭があり、加賀白山おったから祭りとかぶつけてやりました。おったからというのも、伝統芸能とか白山を囲んだいろいろなもので、いいものを見つめ直そうということで4年目に入りました。しかし、声を掛けてもものってくる人間がいないのです。会合にも出てこない。そういう非常に困っている状況なのです。

地域づくりをするときには、やはりどうしても人が必要なのです。自分の家族を顧みずでも、ばかみたいにする人間が3人はいないと駄目です。これは大聖寺で船を浮かべている団体を知っていますか。あれだけ新聞に船、船とよく出て、新聞社もいいかげんにしろと思うくらいに船の記事が出ますね。あれをやっている人たちは、船を2台150万で、自分たちがお金を出して買ったのです。行政が金を出してやるので加わらせてくれと言っても、「市の金が絡むと、ひもが付くので駄目だ。自分たちでやる」というので、10人で金を出して買いました。そういうことをやっている、瀬戸さんという、よく新聞に出ているあの人が言っていました。実は何をしても、会議を開いて相談すると、だんだんマイナスしかないそうです。だから、やると決めたら、買ってしまい、それから金策を考える

と。本当なのです。

その話も一理あって、こういう地域づくりでいろいろな話をして、みんな同じことを言うのです。結局は話合いをしても、だんだん尻すぼみで、「いやあ、そんなことをやっても、ちょっとうまくいくか分からない」とか、そのような話ばかりになって駄目になるので、もう考えない。やるならやると。そういうことを実践していくのも一人はいないといけないと。

私は「ごはんばーがー」を作った人たちもよく知っているのですが、私はおはぎソフトというものをしました。ソフトクリームに日本で初めておはぎを入れた。おはぎ屋なのでおはぎを入れるという。それで爆発的に実は売れて、1日400本という日もありました。300円が400本売れたら、単品で12万円の売り上げです。すごいです。ゼロのものがそれだけになる。それも、実は発想ももちろん大事ですが、ベースは今のおはぎ屋というのは、昔おはぎを売っていたのです。芝寿しの元になったと、芝寿しの会長も来られて言っていました。そういう過去があって今があると。何も結び付きがないのに、やっても駄目なのです。やはり鶴来でコロッケをしても駄目なのです。何かがないと駄目なのです。やはり商品づくりとはそういうものです。

今ひそかに売れているのが、笹寿司を押し押し型です。12個とか24個という。それはいつもお客さんと接していて、「1升や2升は持っているけど、こんなもの、年に1回しか出せない。小さいものを作ってくれ」と言われて、作ってくれる人がいたので、作ったら爆発的に売れています。中身の笹寿司も売れているので、笹寿司だけで、今、すごい売り上げがあります。

鶴来は笹寿司の元なのでということで始めたのですが、先ほど森山さんがストーリーと言いましたが、物語があったりすれば、それに着目してうまく売り出す。それはマスコミ

を使うと、実はわれわれ、まちの駅もJRが3カ月宣伝してくれまして、北陸3県の主要駅に全部、鶴来のパンフレットを置いてくれたりしてくれたのです。頑張っているとどこかが飛びついてくれて、それが相乗効果でどんどんいくということも一つです。うまく行動を外に発信するというのも非常に大事かと思えます。それが自分たちの力になって、また先に進める。

そして、やはり実績、売れるものを作るということも非常に大事なことです。実は僕は多摩ニュータウンに行きました。中国の食品事件から、「顔が見えない、どこで作っているか分からない、誰が作っているか分からないものは、買いたくない」という人たちが、あの団地にいるのです。30万人。周辺を入れると100万人。その人たちが例えば鶴来の米を買ってくれば、それだけでお米屋さんはやっている。そういう事業をやろうとしています。能登よりも先に、もう僕は現地に行きましたので(笑) 12月からやります。

やはり、人というのは育てるものでもあるけれども、素質を見抜いて、こいつならだまされるだろうという人間をつかまえる(笑)ということも一つかなと思えます。一応地域づくりには大事です。だますのも大事。抜けないようにするのも大事だと思えます。

【赤須】ありがとうございます。辻さんのお話の中で一つ感動的なことがありました。それは、人のために何かをするということは非常に価値があるというお話です。そのとおりだと思います。これは共に助け合う、共助という言葉方をしています。公で助け合う公助に対して、自分たちや家族で助け合う自助とか互助ということがあるわけですが、そのちょうど中間辺りに共助があり、そのところにやはり価値があるのではないか。これは現代的な新しい考え方であると、私は思っています。そこが地域づくりのポイント、要で

はないかと思いながらお話を聞いていました。ありがとうございます。

さて、お待たせしました。水野さんには先ほどから出てきた町家とか土蔵のところをよくやっつけていらっしゃるの、その辺でどういう価値を見つけ、どのようなことをしているのかというお話を。

【水野】町家だけに絞ってお話しします。金澤町家研究会を3年前に立ち上げて、今年2月にNPOになりました。市民や大学の先生、学生たちとグループを作っています。なぜこういうものを作ったかということ、金澤町家というのは、昭和25年以前に建てられた住宅をいうのですが、毎年300棟ずつくらい、極端に言うと毎日1棟ずつくらい壊されているのです。最近、うちの近くでも壊されましたが、そういう動きが止まらないのです。なぜかということ、一つはやはり町家を持っていらっしゃる方が、「こんなばたばたな家なんか誰も借り手はいないだろう。売れないだろう」という思い込みがあるし、不動産屋に相談しても、不動産屋は「面倒くさいし、壊してしまいなさい。壊して駐車場にしてしまいなさい」と。駐車場にして借り手がいるかどうか、今はもう分からない状況ですが、不動産屋はそう言うのです。一方で、若い人たちを中心に、そういう町家におしゃれに住みたい人たちがたくさんいらっしゃる。そういう人たちが繋がらないのです。住みたい人、持っている人が繋がらない。だから壊されていくのです。

金沢の市民芸術村に金沢職人大学校というのがあります。そこは、10年くらい仕事をなさっていた方を再教育する学校です。金沢市長が作られました。そこは3年間勉強しなければいけないのです。各業界から推薦された、腕のある人を再教育して、もっとスキルアップするわけです。その人たちは修復専攻科というところで、町家などを修復する技術

を3年間学ぶのです。そうして学んで卒業しても、修復する現場にありつけないのです。せっかく技術を持っているのに、それが仕事にならない。そういう人たちもいるのです。だから、町家というまちの資産もあるし、そういう技術を持った人の資産もあるのだけれども、それが繋がっていないのです。

それが問題だということで、今、活動をしていて、「町家巡遊08」というのをしました。準備期間は1カ月半だったのですが、いろいろ呼び掛けをすると助けてくださる方がいて、1カ月間、40ぐらいのプログラムをしました。なぜこのイベントをしたかという、町家というものの自体、まだまだ市民の人たちが知らないで、それを知ってもらおうという狙いがあったからです。いくつかあるのですが、町家拝見というのは、普通の生活をしている町家に、つかつかと入っていき、お宅を見せてもらうのです。このようなことはなかなかできないだろうと思ったのですが、協力してくださる方はたくさんいらっしゃって、十数軒見せてもらったのです。普段見せてもらえない家に入れるわけですから、たくさん見に行きたいです。あるお宅は、そこに北欧のアンティーク家具を入れて催しをしたのですが、2日間で300人来ました。普通のモデル住宅でそれだけ入るところは絶対にはないです。そのぐらいやはり皆さん関心があるのです。

あるいは、住みたい町家を探そうという催し、プログラムは、不動産物件に挙がっているもの、借家とか売買する物件を、普段はなかなか不動産屋に行って「見せてください」と言えないのだけれども、その日限り5~6軒をオープンにするので、好きな時間に来てくださいというふうにしたのです。すると、高山からもいらっしゃってました。2回いらっしゃいました。もう住みたいのです。多分その人は東山に住むことになると思います。そういうことも大事ですが、それを開けてお

くと、学生が当番をしているのですが、近所の人たちが「何してるんですか？」と聞きにくるのです。そして、「実はうちも空いてるのがあるんだけど、そういう引き手があるんだね」となるのです。そうやって少しずつ広がりが出てきました。

水引細工も掛けたのですが、デザインは置いておいて、今回1カ月間やってみて、何となく町家に関してざわざわとしてきたのです。これをこれからもっともっと大ごとになるようにやっていくのですが、今年はとりあえずイベントとして準備したのです。来年から本番をやろうと思っているのです。

町家で学ぶ。例えば建具職人の方に、町家の工場でお話を聞くということをやりました。すると、20人ぐらいいらっしゃいました。聞いてくださった方もいいのですが、そのお母さんが押し寿司を作ってもてなしてくれるのです。そうやって人が来てくれるのがやはりうれしいのです。自分たちのことが誇りに思えるから。そういうふう動きが出てきたのです。町家で学ぶ、町家でアートとか、そういうことをやってきました。

私が言いたかったのは、先ほど、スペースのデザインや、グラフィックデザインなどがありましたが、私はそういったことが得意なのではなくて、仕組みをデザインするということが得意なのでそれをしていきます。土蔵も町家もそうですが、そういった資源を繋いでいくことによって、町に魅力をつくるということを考えています。今、私たちは町家研究会というNPO法人ですが、もう一つ事業組合、LLPを作ります。今、もう登記手続きを始めましたが、町家研究会に相談に来た物件をきちっと腕のある人に修復してもらおう、改修してもらおうと思っているのです。職人大学を卒業した設計士の方がいらっしゃるのです。その方々と組んで、相談を受けた設計士が責任を持ってやる。仕事をするときには、そこを卒業した職人さんでチームを作ってや

ってもら。そこでもう事業にする。ビジネスにするのです。そこまで持っていかうと思って、この町家巡遊というイベントをやりました。それを少しずつ広げていかうと思っています。

やはり生業にしないと、お金が落ちないといけないと思うので、イベントで終わらせるつもりは全然なく、そういう方向に持っていかうと思い、町家巡遊といったことをやりました。

【赤須】ありがとうございます。町家のことで何となくざわざわしてきたという感覚がすごくいいですね。静かに見えるところでも、一滴垂らしていくと何か動き始めていくというようなことがあるということ。

それと、水野さんがおっしゃった中で印象に残ったのが、デザインはデザインでも仕組みをデザインしていくということです。これはいろいろな事業をやっていく上で、継続させていくために、あるいは持続させるためには絶対に仕組みが大事です。最初は思いつきで始めるわけですが、思いつきだけでは持続しない。これがどう展開していくか。どういうふうに着手するかみたいなこと。あるいは誰を巻き込むか。そのようなことを総称して仕組みをデザインするとおっしゃったのだらうと思います。重要な視点であると思います。ありがとうございます。

質疑応答

【赤須】それでは、2周しましたところで、フロアから少しこの人にこの辺のことを聞きたいとか、私はこのようなことを言いたいということがありましたら、お手を挙げていただけますか。どなたでも結構です。はい、どうぞ。

【質問者1】私は金沢大学から来ました佐川と申します。5人の皆さんのお話、大変面白

かったです。それで質問をさせていただきたいのは、今、学生にどのようにして地域の取り組みを紹介できるか。彼らをどのように地域の取り組みに夢中にさせることができるかといったことを考え始めているところです。アドバイスをさせていただきたいのは、学生は今どのような反応をして、彼らは結構役に立つというとおかしいですが、結構熱心に取り組んでくれるというような、実際の事例がありましたら少し教えてほしいです。

【辻】実は白山市の白峰の方で金沢大学、法政大学、金城大学、いろいろな大学が入ってきていて、古民家を地元の有志で買い取って、そこを大学の研究室にして活動しています。来ている子たちは非常に一生懸命やられています。今、そこに白峰出身のうちの課長がいます。それは自分の将来も見据えてかどうかは分かりませんが、われわれのNPOにも何回か金沢大学の学生が来たりしました。例えば行政に就職したいということで、その前にいろいろな形の活動をしている団体を見たいなど、そういった目的を持って来ています。そういう子たちは非常に一生懸命、研修というか、いろいろなことをしてもらいます。

それと、去年、実は観光ボランティアの全国大会が金沢であり、1000人規模の全国大会のときにも、金沢大学の神谷先生の学生さんたち、10人ほど、分科会に分かれて、実はずっと作ってもらいました。大体ボランティアというのは60歳以上なので、パソコンが触れない。パワーポイントが作れないということで、その場でパワーポイントを作り、発表して、画期的なボランティアの全国大会だったという評価を全国で受けました。

そういったことで学生さんができる活動、それと自分の将来に生きるような活動という形で、一生懸命している人たちはたくさんいます。われわれもそういった後継者をつくるという意味では、大学の方と積極的にこれか

らやっていないと。人材を育成するという
こともやはり見据えながら。今の活動ももち
ろん一生懸命やらないといけません、それ
以上に後継者を育てていくという意味では、
大学と一緒にやっていくのが一番近道かと思
っています。

【近藤】 県立大学の動きとしては、援農隊と
いうサークルが千枚田の田植えや稲刈りに行
っています。それから中島の方のお熊甲（く
まかぶと）祭り、猿田彦に参加しませんかと
いうポスターなどかなり積極的に出ています。

それから、私が仕掛けた仕事なのですが、
マーケティング論が講義の中にあるのです。
その中で、農からいろいろな仕事をしていく
という社長さんが何人かいらっしゃるので、
講師として事例の紹介をしてもらっています。
大学ではそういう単発的は講師の謝金は打っ
ていないですから、中小機構の方で予算打ち
をするような形で進めました。11月の末か
ら入り、ぶどうの木の本さん、丸八製茶の丸
谷さん、鹿西の軽部さん、小原蒟蒻（株式会
社オハラ）の小原さん、最後に学生の方でそ
ういうマーケティング論で、自分たちはどう
いう仕事ができるかというプランを作り、食
品協会の方々に発表する場をつくるという形
で今年は進んでいます。

【質問者2】 先ほどお祭りの話が出てきてい
ましたので、お祭りや民謡の関係を含めてお
聞きしたいと思うのですが、富山も非常に民
謡とかお祭りが盛んです。能登方面もお祭り
とか非常に盛んなので、感心して見に行っ
ているのですが、どちらかというこの加賀地
区というのは素晴らしい民謡もあるし民話も
あるし、すてきだなと思ってたくさんあるの
ですが、祭りにしても獅子舞にしても素晴ら
しいものがあるのですが、若者が減っている
ために獅子が回されないとかという在所もあ
るのです。だから素晴らしいものをもう少し

発掘し、輝かせるにはどういう仕掛けをし
たらいいのか、どう若者にふっかけていけば
いいのか。その辺のところをお聞かせいただ
けたらうれしいと思います。

【赤須】 所属はどちらですか。

【質問者2】 私は能美市のまちづくり市民会
議の者です。

【森山】 能登のお祭りというのは、その祭
りをやる上で世代間の役割が必ずあるのです。
加賀のお祭りはそれほど詳しくないのですが。
本当に子どもから青年、壮年、お年寄りまで、
それぞれが役割を担うようにできているので
す。毎年同じことを何百年とやっているの
ですが、飽きない。演出家がないのに感動す
るということが繰り返されています。少なく
なったところを、層でいうと、多分、能登も
そうですが、最初に子どもが少なくなっ
てくるのですが、子どもが少なくなっても、お
はやしを教えるとか木遣りを子どもたちが歌
うなどといったことを次の世代に継いでい
くということをやめない限りは、繋がっていく。

あとは第1分科会で話に挙がっていたのは、
やはりやっている人たちが楽しんでいないと。
これはコミュニティビジネスの話でしたが、
眉間にしわを寄せてやっているところには誰
も寄ってこない。楽しんでやっているところ
には人が集ってくる。そういった意味では、
本当に能登の祭りは参加することで楽しめる
ので、最近では地域外の方が若い衆に交ぜて
くれということでやってきているパターンもあ
るようです。ですから、まずは楽しんでみる
ことかなというぐらいしか言えないのですが。
外の目から見て分かりますか。ずっと中なの
で、よく分かりません。

【谷内】 僕は七尾に外から来て、内になっ
てしまったのですが、結構、私に来てびっくり

したのは、多分どこの地域も本当はそうなのかもしれないのですが、ケーブルテレビで七尾の方は準備段階からドキュメンタリー風に映しているのです。祭りの当日の様子を流しているところは多いのですが。そして、その映像をリクエストして見ることができるので、親戚たちが正月に帰ってきたときなどに、みんなで見て「あいつ、あんなに大きくなったな」とか、いろいろ話して、それを見ながら一緒に酒を飲んで、懐かしがっているという場面が実はあります。どう輝かせるかというか。やはりその中で準備からずっと関わり、本当に1カ月も前から、地味な作業を一生懸命やっている青年団の方々がいるわけです。獅子舞でも、言うことを聞かない子どもに踊りを神社の境内で毎晩1カ月間教えている兄ちゃんたちとかがいるのです。そういう人たちがちゃんと映って、「頑張ってるね」と言われる仕組みが、実はケーブルテレビだったりするので、能登島では、狭い地域で、大変申し訳ないのですが。

でも僕はそれがすごく大事だと思っています。だから、やはりどこかで見られているわけです。多分、地域の青年団で活動していて、ただ教えているだけだと、誰も見ていないのですが、地元のケーブルテレビが結構こまめに取材に来て、子どもが泣きながら練習しているところを、パーンとたたきながら教えたりしているのですが、そういう映像などもろに映っているのですが、やはり感動的です。毎年同じことをやっているのですが、人が替わっていくのです。それが毎年記録として残っていて、しかもリクエストができるようになって。「おらが頑張っていたときの映像、ちょっと見てみんか」とかと言いながらリクエストして、正月にみんなで見て楽しんでいる。現代の機器を使いながら、すごくうまく評価されるというか、認知される仕組みができていくなあと、私は非常に感心して見ているのです。

ですから、若い人が報われるような仕組みというのでしょうか。七尾はたまたまこの間、二十歳の皆さんが成人式を企画するので、実は全国1位になったのです。そのときに、合併して地区はみんな違うのですが、キリコだけは共通だよねということで、二十歳の若者たちが舞台の上でキリコを担いだのです。そういう取り組みが非常に評価されて、この間日本一になったと表彰されていました。あのようなことがあると、やっぱりまたキリコともっとやろうかと思えますね。多分、あるいは公民館の生涯学習課の職員などが若い人たちをのせていったと思うのです。「自分たちが企画していいんだよ」という中で、キリコを担ぐなど、前代未聞だったわけです。でも、借りてきて担いだのです。そういうことがやはり評価にも繋がったので、きっと彼らは、成人式のときだけでなく、少なくとも毎夏、キリコを担ぎに帰ってくるような気がします。

【辻】文化庁の事業で、実は伝統芸能などを残すので補助金を出すという事業もありますので、そういうところから攻めていくということも一つです。われわれの加賀白山おったから祭りというのは、地元にある加賀の獅子舞などの祭りを残そうというものです。こういう機会に参加するというのも一つです。

ここに行政の方が結構いらっしゃいますので言いますが、われわれみたいな活動をしている人間に、情報を提供してくれないところが多いのです。実は鉄道廃線のときも、北陸鉄道が22日に発表したときに、10日以内に国に意見書を出さないと1年未満で廃線が決定すると。そういう情報は31日に受けました。1日付けの消印までOKで、それ以外は受け付けられませんというようなことで、慌てて文書を作って出しました。行政の方もこういう活動をしている人たちにもっと情報提供をしてもらわないと。

実は第4分科会で出たのが、実は今、農協

とか商工会とか観光協会とか、既存団体で仕事をしていると、もう地域はつくれないと。もう取っ払って農協だろうが商工会だろうが何であろうが、みんなで動こうと。小泉さん以来、民間はそういう流れにどんどんなっています。でも、行政は相変わらず縦がずっと。当たり前前の話ですが。でも、そこがもう少し何かならない限り、地域づくりはうまくいかないのではないかと。私は県庁に行くと14階から8階ぐらいまで、いろいろな課と関わりがあって、上から順番に下りてきますが、それくらいわれわれにとっては一つの団体がいっぱいの課と関わっているのです。でも、一つの課はわれわれの団体と一つでやっていますので、全然横の繋がりが無い。それを何とか取っ払ってくれるような行政の工夫もしてくれないと、いくら協働といっても、協働できないという現状があります。

今、祭りの話も文化庁のそういう補助金が出るというのもご存じではないですよ。

【質問者2】 知っています。

【辻】 知っていますか。そういうことを見つけてやるとか、いろいろな方法はあります。来年、白山市では全国獅子舞フェスタを開催するそうですが、そういう情報をいち早くキャッチして、そういうところに参加するのはどうでしょう。

【赤須】 ありがとうございます。時間が少し超過してしまいましたので、この辺でまとめてみたいと思います。

先ほどの祭りのことですが、私も実は珠洲の方の祭りが存続不能になっていて、どうしようという相談を受けていて、少し考えているのです。今話を聞きながら思ったのですが、地域の中にインフラがあって、コミュニティが守られているところは、祭りもうまく機能しているということだろうと。つまりイ

ンフラがあって、その上に文化があるということ。だから、祭りとか民謡そのものだけをとらえて、それをどうするかというのはなかなか難しいのではないかと。祭りをとらえて、何かをするのもいいけれども、その場合はやはり地域の中のコミュニティをどうつくっていくかみたいな視点がない限り、なかなか伝承していくことは難しいのではないかと考えました。だから、珠洲でやることをもう一遍見直そうかと、今、思っているところです。

今日はいろいろな事例をお話いただきまして、参考になったかと思えます。しかしそれも、ぼつんぼつんと1個ずつ頭が飛び出しているものをお話ししていったと思えます。その背景にあるものを、どうしてその地域からそういうものが飛び出してきたのかという背景をぜひくみ取っていただきたいと思えます。誰か突出した人がいて、いいアイデアがあって生まれた、うまくいったという面もありますが、やはりそれを生み出すバックグラウンドは確実にあるわけです。それをぜひ見ていていただきたいと思いました。

そのバックグラウンドの根本にあるものは何か。今日の議論の中で出てきたキーワードで、新しい言葉として覚えていてほしいのが「ソーシャルキャピタル」(社会関係資本)という言葉です。森山さんが簡単に「繋がり」と。繋がり強さ、繋がり深さとおっしゃいましたが、そのとおりです。いろいろなものが繋がっていくことで、「ちから」が生まれてくると。いろいろなものが繋がるということが大事なのです。地域の中に同じものばかりがあって、同じものばかりが繋がってもあまり、「ちから」は出さない。多様なものを繋げていくということをこれから心掛けていくことが必要ではないかと思いました。

長時間ありがとうございました。つたないまとめではありますが、これでパネルディスカッションを終わりたいと思います。